

日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議（第6回）議事要旨

1. 日 時：平成27年2月19日（木）13：00～15：00

2. 場 所：内閣府本府庁舎3階特別会議室

3. 出席者：

〈構成員〉

座長	尾池 和夫	京都造形芸術大学学長
座長代理	羽入佐和子	お茶の水女子大学学長
	隠岐 さや香	広島大学大学院総合科学研究科准教授
	駒井 章治	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授
	須藤 亮	株式会社東芝常任顧問
	畠中誠二郎	中央大学総合政策学部教授
	原山 優子	総合科学技術・イノベーション会議議員
	柳澤 秀夫	日本放送協会解説主幹
	吉倉 廣	国立感染症研究所名誉所員

〈日本学術会議〉

大西 隆	日本学術会議会長
田口 和也	日本学術会議事務局長

〈事務方〉

阪本 和道	内閣府審議官
山田 淳	大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室室長
福井 仁史	大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室次長
吉住 啓作	大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室参事官
山崎 速人	大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室参事官

4. 会議次第：

- (1) 開会
- (2) 報告書案について
- (3) 閉会

5. 概要：

- (1) 事務方より報告書案の事前送付版からの修正箇所について説明があった後、報告書案について議論が行われた。概要は以下のとおり。

《報告書の構成・項目、全体的な書きぶりについて》

- 我々の最大のミッションは、10年前の改革の方向が適切なものだったのか否かについて答えることではないか。報告書案は、活動報告のアセスメントとしてはきれいに整理されているが、改革の成果に対する見解が見えづらくなっている。まずは（平成

17年改革の際) 総合科学技術会議がまとめた改革案があり、それに対して何をしたのか、その結果どうなったのかを、我々が議論した上で、ある程度のコメントをどこかに書くべきではないか。それほど長く書く必要はないと思うが、たとえば「第3 日本学術会議の活動のさらなる活性化に向けて」に入る間の箇所に、有識者会議としての意見の全体像をまとめたものを入れてはどうか。

⇒ それでは、それを文章化していただけないか。

⇒ 項目立てくらいはできると思う。それに皆さんの意見を書き込んでいただければ。

- (報告書案 p9以降の書き方について)「平成17年改革後の取組と評価」とあり、取組と評価が一緒になっているが、まずはファクトベースで「何をしたか」があり、それに対して我々が評価ないし意見を述べる、ということではないか。取組に対する評価が「評価」で、さらにこうすべき、というのが「意見」なのであれば、そのような形で書くべき。場所によって評価がある箇所があればない箇所もあり、取組と評価が同じパラグラフにまとめられているので、分かりにくい。

⇒ 構成としては、「平成17年改革後の取組と評価」の箇所ではまずファクトを書き、有識者会議で議論があった箇所については「評価」として主なご指摘を取り上げている。「評価」がないものは、有識者会議で議論がなかったものである。有識者会議としての意見については、はっきりと矢印の下に書き分けている。

⇒ それであれば、3つに分けてはどうか。現在1つにまとめられている部分については、まず「取組」を書き、「評価」を「指摘事項」という形にした上で、「指摘事項」がない部分についてはここで議論をして埋めていけばよいのではないか。

- 有識者会議で議論がなかったせいだと思うが、「第3 日本学術会議のさらなる活性化に向けて」には、各国アカデミーや国際学術団体との連携の話がまったく出てこない。例えば、フランスのアカデミーが文書を出し、問題点を指摘しているが、こうした海外のアカデミーからのコメントに対して、日本学術会議は何か応答しているのか。日本のことについては口を出すなという考え方もあるが、国内では言い出しにくいことを海外のコメントを通じて問題提起する、というやり方もある。日本国内で黙殺された問題点を明らかにするには、海外のアカデミーの力を借りなければならない。国際関係については、項目を1つ入れる必要がある。

- 報告書案には、日本学術会議自身がやるべきことがかなり書かれている。有識者会議で出た意見をすべて書いているのだろうが、ここまで書かなければならないものだろうか。書かれても日本学術会議が困ることも含まれているのではないか。ある程度のことまで書いて、細かい意見は付録に落としてもよいのではないか。最も重要なのは、日本学術会議がやりやすいような内容にすることである。

⇒ 一般論としてはよくわかる。ただ、報告書案では、ここまではやっていただけたら、というところを書いているつもりである。

≪「第1 はじめに」(報告書案 p1～p3) について≫

- p2の「学術の理解を超えた部分に対する不安」とあるが、これは何について言っているのか。
 - ⇒ 報告書案作成段階でもいろいろと悩んだ箇所である。事務局から経過を説明願いたい。
 - ⇒ もともとは「学術に対する不安」としていたが、それでは学術そのものに対する不安になってしまうため、尾池座長のご示唆も受けつつ、報告書案のような表現にした。
 - ⇒ ここでは、何か1つのことを指しているというよりは、複数のものを含んでいる。例えば、人工知能に関して「人間のコントロールが及ばなくなるのではないか」というような不安など、様々なものがあると思う。単に「学術に対する不安」とすると、学術全部を不安に感じるというような意味になってしまうので、一般市民がその理解を超えたところに対して不安をもつ、というような書き方にしている。こういった趣旨を表すのに適当な表現があれば、ご提示いただきたい。
 - ⇒ 「理解を超えた」という形ではなく、科学を社会において応用する際、それがよからぬことに使われた場合には困る、というようなという視点で書いてはどうか。
 - ⇒ よからぬことに使うということと犯罪行為ということになるが、それが問題なのは言うまでもないことである。ここで述べているのは、科学の理解が及ばないところに対する不安、ということである。
 - ⇒ 犯罪というよりは、セキュリティの問題や生命倫理の問題に関してどこまで人間がコントロールしてよいものか、といった話なのではないか。
 - ⇒ 主語を変えて、学術が発達し過ぎて社会の対応が追いつかない、というような形になるように言葉を入れ替えてはどうか。例えば、「学術の急速な発達とそれへの社会の対応に関する不安」というようにしてはどうか。

≪「第2 日本学術会議に期待される役割」(報告書案 p4～p8) について≫

- 1(2)に「全ての学術分野の科学者を擁していること」とあるが、このことを期待するというよりは、想像し得ない未来に対していかに我々が対応していくか、ということが期待されているのではないか。
 - ⇒ 1の(1)～(3)は、現状について書いているのであって、今後期待される役割については、p5以下から2で述べている。したがって、今のご指摘については、2のどこかに入れ込むか、もしくは読み込むということになるのではないか。
 - ⇒ 「第3」のどこかに書き込むことも考えられる。

- 1(1)の「自律した科学者の集団」の「自律した」はどこに係るのか。2行目から「組織自体が自律性をもった科学者の集団であり」と書いてあることを踏まえ、「科学者の自律的な集団であること」又は「科学者の自律した集団であること」と書く方が、整合性がとれるのではないか。

- ⇒ この文言はどこかから引用したものか。
 - ⇒ 否。
 - ⇒ そのまま引用したものではないということなので、修正することは可能である。
 - ⇒ 「自律した科学者」を英訳すると、おそらく“responsible scientist”であり、おかしなことになる。この表現については、少し考えた方がよいと思う。
 - ⇒ 何に対して自律しているのかを書くと、よりクリアになるのではないかと思う。
- 「第2」に書いてあることが既に皆が認識していることであれば、そのように書くべきであるし、そうではなく意見として「こうあって欲しい」ということであれば、そのように書くべきである。前者であればもう少し詰めなければならないし、後者であれば、所与のものとして次の中身の方で期待する、ということになる。また、「期待される役割」の「期待する」とは誰が「期待する」のか、この書き方ではなかなか分からないので、クリアにしなければならない。
- ⇒ 2の「日本学術会議に期待される役割」がまさにこの有識者会議でご議論いただきたいところである。1の部分は、むしろ現在の法律の規定等によってこうなっているという現状を述べている。
 - ⇒ 第2の1では、「このように言われている」という現状を述べ、第2の2と第3で「もっとこうすべきだ」という意見を述べる、という構成である。
- 「中立」という文言について、人文・社会科学の分野では、人間社会において「中立」はない、という議論がある。「中立」という言葉を使えるのは、アクターがはっきりしている裁判などのかなり限定された場であり、社会の中にどういった立場があるかは数えきれないので、中立という言葉を使うのは奇妙であるという感覚を持つ者は、少なくとも私の周りには多くいると思う。特に、東日本大震災の際、放射性物質の危険性等に関して「中立的な視点から」という言葉で迂闊なコメントが出てしまい、かえって一部の人に学術への不信感を生んだということがあった。中立という言葉は非常に難しいので、ここではむしろ「自律性」といった言葉の方がしっくりくる。
- ⇒ 「中立」という言葉は、「極端に偏らない」という意味合いで使われることもあると思うが。
 - ⇒ その場合は、どういう中立なのかを書くべきではないか。立場の中立なのか、極端な方に行かないという、バランス、公平性への配慮という意味なのか。それがニュアンスとして伝わればよいのではないか。
 - ⇒ p4の「常に中立的な立場に立った見解」という箇所では、あまり偏った立場をとらない、という意味合いで使っていると思うが。
 - ⇒ 何が偏っているのかを国が決めるのか、という反論もあり得るので、例えば「常に公平性に配慮した立場に立った」といった表現の方が自分は馴染みがある。
 - ⇒ タイトルの「独立性」を受けて「中立的」という文言が出てくるので、ここでは、法律上根拠のある独立性がベースにあって、政府の干渉を受けない、という意味での中立性だと思う。したがって、敢えて「中立的」という言葉を使わず、研究者がア

カデミックな立場からものを申すことができる、という中身を書いた方が分かりやすいのではないか。

○ (1)で「自律した」とあり、(3)では「独立性」が出てくるが、両者はどう区別されるのか。

⇒ (1)では科学者の集団の意味を言っており、(3)では政府等との関係について言っている。

⇒ 「自律した」はなくてもよいのではないか。

⇒ 言わずもがなではあるのだが、単に「科学者の集団であること」というのもいかなものか。

⇒ 我々が現在の制度をどう理解しているか、という観点から申し上げる。政府の審議会等の場合は役所が委員を選んでいるのに対し、日本学術会議ではコ・オペレーション方式をとっており、最終的には内閣総理大臣が任命するという手続であるが、日本学術会議が推薦しそれを踏まえて任命するという形になっている。(1)では、このような選出方法により集団そのものが自律的に選ばれているというプロセスを指しているのではないか。一方、(3)については、その集団の活動において法律上独立性が明記されている、ということだと理解している。

⇒ ロジックとしては、科学者の自律した集団であるが故にコ・オペレーションが適当、ということであって、コ・オペレーションなので自律性が確保されている、ということではないのではないか。

⇒ それはその通り。

⇒ (1)の2行目に「組織自体が」とあるが、これを入れるのと入れないのとで少しニュアンスが違ってくるのではないか。組織の話を入れるから(3)との関係が分かりにくくなっている可能性があるので、そうであれば(1)の「組織自体が」を削除することも考えられるのではないか。

⇒ 「自律した」が科学者の前にあるから分かりにくいので、ひっくり返して「科学者の自律した集団であること」とすればよい。タイトルの修正に合わせて、内容についても、「日本学術会議は、」…「科学者の自律性をもった集団であり、」という順番にすればよいのではないか。そうすれば「組織自体が」があっても構わないのではないか。

○ 2 (1) ①で、「将来を見据えた的確なテーマを自ら設定し、…」とあり、これ自体は大事なことであるが、さらに期待するとすれば、日本学術会議には、50年後の地球の在り方、日本の在り方を提示していただきたい。「あるべき姿」が打ち出されると、それに向かってどういうテーマを議論するべきか、という各論が出てくると思う。ただ、心配なのは、それは果たして日本学術会議の役割なのか否か、という点である。

⇒ 日本学術会議は政策を提示する機関ではないが、将来の姿は提示してもよいと思う。ご指摘は、的確なテーマを設定する目的について仰っているように思うので、例えば、「あるべき姿を提示するための的確なテーマを自ら設定し」などとしてはど

うか。

- ⇒ 英国では「**Horizon Scanning**」という活動を展開しているが、実質的にはロイヤルソサイエティーが担っており、アカデミアの集団で様々な人が集まって議論し将来の姿を示し、それをベースにしていろいろなことを決めていく、ということが行われている。日本には、その役割を担っている機関が現在のところなく、アドホックに会議を設置している状況。アカデミアの集団であり分野横断的な組織である日本学術会議に期待されるところではないか。
- ⇒ ぜひそのような役割を期待したい。
- ⇒ 将来の姿を見据えて、それに向かっていくための的確なテーマを設定する、というニュアンスか。
- ⇒ 将来予測は現在の政策に影響する。例えば原子力の安全に関して言うと、将来原子力発電所を潰すという判断にも続けるという判断にも繋がり得る。政策に関係することになると日本学術会議の中立性に問題が出てくるので、オプションを示すのはよいが、「こうあるべき」という提言を行うのは、かなり危険性を伴うのではないか。
- ⇒ 即答できる課題もあれば、簡単に結論を出せず長期にわたって議論する課題もある。将来の姿を描けるものは描く、ということではないか。
- ⇒ 将来予測と将来の姿を描くこととは、必ずしも同じではないのではないか。将来予測は、過去のデータを基礎にして将来がどうなるかという道筋を示すものであり、こちらについては、今出たような政策への影響という問題がある。一方、様々な分野の方が集まって議論することによって可能性が見えてくる、といったものすら現在は無いので、その機能が欲しい、ということではないか。
- ⇒ 我々も将来の姿を示すことが重要であると考えている。「将来の姿」には思想的な理想や宗教的な理想など様々な描き方があると思うが、日本学術会議としては、科学的な根拠に基づいた将来の姿ということだと思う。例えば、人口減少問題を軸に将来の議論をするという試みを行ったことがあるが、これは、日本の人口予測がある程度科学的に予測されているという前提に立ったものである。科学的根拠に基づく将来の姿というのは、現在とはだいぶ違うので、そういったことを議論し何をすべきかを考えるのは、日本学術会議的なアプローチであると思う。地球環境問題もその例。一方、将来までの傾向がはっきり示されていない、科学的根拠がはっきりしない中で、なんとなくこう思う、と述べるのは、日本学術会議的ではないので、我々としては、どういう描き方をするかという点に留意し、自らの特色を見出さなければならぬと思う。
- ⇒ 今の言葉を使わせていただくと、「科学的根拠に基づく将来の姿を見据え、的確なテーマを設定し～」といったところか。
- ⇒ その姿が単一かどうか、という問題がある。科学者は、何か特定の姿を推奨することはやめた方がよい。オプションを示し、あとは総合科学技術・イノベーション会議などに任せるべき。
- ⇒ そのような日本学術会議の立場は、先ほどの「独立性」で保たれているのではな

いか。

- (1)の①と②は、長期的課題と短期的課題、という分け方、との理解でよいのか。長期と短期の両方を見据えている、という形でまとめると分かりやすいと思うが。
⇒ ①と②の分け方は、ご指摘のとおりである。
- (2)について、「科学者コミュニティの道標」とまで言ってしまってよいのか。様々な科学者コミュニティがあって、様々な課題があり、それぞれの課題についてリーダーシップをとる、ということだが、本当にそういった構造になっているのか疑問である。また、取り組むべき課題として「学術行政の在り方」とあるが、それについても「道標」としての役割を担うということになると、政策を担う側に対してもリーダーシップをとるというように見えてしまい、踏み込み過ぎではないか。
世の中が変わってきて、これまで担保されていたものが揺らぐ状況にあって、学術と社会の接点に関して常にどこかで議論しなければならない。その議論のリーダーシップをとるのが日本学術会議である、ということであれば、あまり大風呂敷でもなく、分かりやすいのではないか。
- 成果物の出し方を変える必要があると思っている。議論のプロセスを開示することによって様々なオプションを示す方法と、短期的な課題について1つの解をと示す方法の2種類がある。特に今後は、答えが出ないような課題もあると思うので、そこに対応できるような発出の仕方を書き込むとよいのではないか。
⇒ そういった提言等の出し方については、10ページ以降に記載している。
- (2)で挙げられているようなことは、学術の現状をよく解析することから始まる。少し硬くなるが、「学術の現状の解析と今後の方向の検討」など、政治的なニュアンスがないような書き方にしてはどうか。
⇒ 「道標」は、こっちに行くべきだ、という方向性を示すものであるが、そうではなく、日本学術会議が議論する場の役割を担うということではないか。様々な分野の人が集まりアカデミックな立場から議論する場を提供してください、ということであればしっくりくる。方向性はこうあるべきだ、と示すところまで行けるものもあるが、行けないものもあり、今後そちらの方が増えてくるのではないか。
⇒ (2)のタイトルについて、学術界をリードする、ということが1つにはあるが、それに加えて「学術を論ずる場」とする、というのが皆様の意見なのではないか。
⇒ 論じる場をつくるとともに、その論じている内容を示せ、ということか。
⇒ 議論してそれを社会に発信し、社会とインターアクションをとっていく、そのカウンターパートになるのが日本学術会議である、という位置付けではないか。
- p6の「取り組むべき課題」の例の「学術のあり方」の1つ目に「人文・社会科学

も含めた」とあるが、この書き方では、いかにも人文・社会科学が学術ではない、と言っているように思えるので、削除した方がよいのではないか。

- 「取り組むべき課題」という表現は、これでよいのか。日本学術会議が様々なことについて議論する場だとして、その論点が学術の在り方、科学者の在り方、学術行政の在り方なのであって、「課題」というよりは「論点」とした方がよいのではないか。
⇒ 趣旨は分かるが、「課題」である場合もあるので、両方並べることも考えられる。
- 論点ないし課題の粒度が統一されていないように思う。下の方は、「若手研究者のキャリアパス、研究環境の確保」など、政策論に踏み込んだ特定されたものであるのに対し、上の方は、在り方そのものである。揃えた方がよいが、どちらかというとなの方に違和感がある。「学術行政の在り方」については、むしろ、「学術の立場から政策を分析するということは非常に重要であるが、これまで学問分野の中で政策を対象とした研究としてちゃんとしたものが育っていなかったので、それを強化すべき」といったメッセージの方が、上の方と合っているのではないか。「政策のための科学」を少し膨らませたものを想定している。

《「第3 日本学術会議のさらなる活性化に向けて」「1 日本学術会議の活動の在り方」(報告書案 p9～p17) について》

- 疑問点も含めて何点か申し上げる。p9の「議論の過程を見せる透明化」は、具体的に何を言っているのか。会議を公開しろということか。p10の「プロセスの明確化・透明化」の前の「そのための適切な仕組みを整備する」というのは、具体的に何を指しているのか。検討中で書けない所は仕方がないと思うが、具体的に書ける部分は書いた方がよいのではないか。p13の若手アカデミーについての記述で「設置され、本格的な活動を開始するところである」というのは、設置されたがまだ本格的な活動は開始していない、というように読めるが、それで間違いないか。p14についても「結論に至る過程を見せる透明化」というのは具体的に何を指しているのか。また、「優先順位やテーマを明確にする」とあるが、どういうことを言っているのか。これまではテーマは明確でなかったのか。p16に「政府における政策形成と日本学術会議の提言等」との記述があるが、日本学術会議の提言が政府における政策形成に影響を与えるということであれば、順序を逆にした方がよいのではないか。下の「連携関係の構築・強化」の記述についても同様である。また、「現実的で有効な方策についてさらに検討する」とあるのは具体的に何か。書けないなら書けないでよいが。
- 若手科学者に関して、キャリアパスの問題に焦点を当てていただいているのは有難いのだが、あまりその点ばかりではなく、むしろ、変化の速い社会の中で、アンテナがセンシティブな世代である若手を学術にうまく組み込むことで学術全体の発展、活性化を促すというような文言を入れていただけると有難い。

- 「若手アカデミー」について、つくった組織をどう活用していくかを明確にするべき。「地域の科学者との連携」についても、地域レベルの組織をどのように活用していくかが重要だと思う。(2)のタイトルが「科学者コミュニティ内のネットワーク強化」となっているが、単純に人をまとめればよい、という話ではなく、活用の仕方が重要、という趣旨が分かるようにした方がよいと思う。
- 「(1) 政府や社会に対する提言機能の強化」の箇所、自分の発言が取り上げられているが、英国には緊急時に関係する科学者のコミュニティをすぐに結集することのできる組織があり、ここでは、そのような役割を日本学術会議が担うことを意図している。ここにある情報を発信するネットワークという記述をもっと踏み込んで書いていただければと思う。
- 「緊急事態における日本学術会議の活動に関する指針」の内容を注などで書いてはどうかと思う。
- メディアとの関係の箇所について、仕組み作りより、もっとも肝心なのは顔の見えるコミュニケーションということだと思うので、たとえば、「メディアへの能動的な働きかけ」という項目の記述について、「定期的な懇談の場を設ける等により、顔の見える日常的な関係を築き、」としてはどうか。メール等様々なコミュニケーションの手段はあるが、顔の見える関係であるかどうか、メディアに限らず社会との関係においても重要だと思う。
- 「第2 日本学術会議に期待される役割」で「期待する」としたことに対して「第3 日本学術会議の活動のさらなる活性化に向けて」で受けているかどうかについてもチェックして、欠けていれば補充していく、という形でいかがか。

≪「第3 日本学術会議の活動のさらなる活性化に向けて」「2 日本学術会議の組織としての在り方」(報告書案 p17~p24) について≫

- 「会員・連携会員の在り方」について、透明化に関することが多く書かれているが、関係性、ミッション等に関して議論がされていたのであれば、それも書くべきではないか。10年前の改革で会員と連携会員を位置付けたことに対し、それが意味のあるものになっているのか、改善すべきなのか。
⇒ 議論はあったが、意味のあるものになっているかの分析ができているかという点、微妙である。経緯に関しては認識が共有されていると思うが。
- 何点か指摘させていただく。p17の「日本学術会議の役割、組織及び活動等について説明を行う、」とその下の「日本学術会議の役割や組織、活動に関してまとめた」と

いう記述がトートロジーになっている。p20に「地域のバランスについても若干地方圏の割合の増加が見られた」とあるが、下の注を見ると減少している。p21の「有識者会議としての意見」で「適切な方法を検討するべきである」とあるが、これも具体的に書けるのであれば書いた方がよい。p21の「回っていく組織」とあるが、何が回っていくのか。p23の「独立性・自律性の確保」について、「特定の思想や政治的信条に偏ったものとならないよう留意することが重要である」とあるが、これについては表現の自由、学問の自由との関係で、書き方を注意した方がよいと思う。所在地について、危機管理の面から、政治や行政の中枢に近い方がよいので、現在の場所が適当であると思う。p24の「予算要求を独立性・中立性を保ちつつ行う」というのはどのような意味か、よく分からない。

- 場所について、飛行場のない土地というのは、地方から来る者にとっては非常にバリアを高めるという問題がある。身体に障害があったり、時間に制約がある者にとっては、交通の利便性のない場所に移転されるというのは非常に困難なことである。遠隔会議も導入されているが、直接会う機会が減るのは、やはりダメージである。ぜひ、バリアフリーと多様性の観点から、できるだけ、現在の場所かなるべく羽田空港の近い場所を確保していただきたい。
- p23に「日本学術会議は、政府から一定の独立性・中立性を保ちつつ、」とあるが、「一定の」という表現が気になる。日本学術会議法第3条では「独立して」「職務を行う」と書かれているのだから、「一定の」というのは不要ではないか。はっきりと「独立性を保つ」と明言した方がよいのではないか。
- p22の「一方」以降について、「硬直化しないように定年制を定めた」ことに対して「可能な限り柔軟性をもった運用」で対応しようとしてあり、一方、「引き続き一定の新陳代謝が図られるように」と書いてあり、一体どこに真意があるのか分かりにくい。
 - ⇒ 外国人について、国家公務員にはできないとしても、知見を取り入れるという形で対応するという記述になっているが、それと同じような形で、工夫をするべき、というくらいのことは言えるかもしれない。
 - ⇒ 会員については、任期や定年制が法律で定められているので、これを変えようとすると法律改正が必要。一方、連携会員については、法律では連携会員を置くということのみが定められており、任期や再任回数等については規則レベルで定められているので、日本学術会議で改正を行えば対応ができる。そのことを念頭に置いて、その前の段落では、連携会員について記述している。
- 日本学術会議の活動に関わるのは非常に重いことであるので、やはり活動へのコミットの問題は非常に大きい。報告書案では、活動へのコミットや選出方法に関し、意識に関わるが多く書いてあるが、もう少し実現可能性のある形で書いた方がよい

のではないか。

⇒ それはその通りかもしれないが、有識者会議で、コミットしなければならないということが言われているだけで、具体的にどうするかまでは議論されていない。仕上げる段階で具体的な案があれば入れていただきたい。

- 予算の箇所について、パンチがなく、これではあまり変わらないのではないかと、という印象。せつかく、それより前の箇所ですらいろいろと期待される役割等を議論しているので、それを確実に遂行するために必要な予算を提示した上で、その効果的な活用も明確にした上で充実を図る、というような文章にした方がよいのではないかと。予算を増やすのであれば、その意気込みを表した方がよいのではないかと。
- 「第2」の有識者会議に期待される役割に結び付けて、こういったことが期待されるが、現状の事務局体制や予算ではここまでしかできないので、さらに必要、という形で書いてはどうか。
- 「政府と社会の関係」の箇所は、中立性という文言で問題ないのではないかと。p4(3)については、学術の立場、学術の専門性等に言い換えることになったと思う。中立性という文言が随所に使われているが、文脈によって意味合いが異なるので、使い分けがもっとあってもよいのではないかと、という気がする。
- p23に「日本学術会議は本質的には事業実施機関ではなく審議機関であり」とある。広報やメディアへの働きかけ、科学者間ネットワークの構築など、審議のみでは収まらないような活動をしていると思うが、このように決めてしまってもよいのか。
⇒ ここでは日本学術会議の性格を述べているのであり、機関としての性格の分類では、日本学術会議は審議機関として整理されているということである。審議機関だからといって広報等の活動はできないかということではなく、例えば政府の各省庁は政策形成機関であるが、広報等も行っている。この箇所については、このままの記述で問題ないと思う。
- p24に「予算の充実を図ることも考えられる」とあるが、ここははっきりと「予算の充実を図る」でよいのではないかと。予算は独立性と表裏一体であり、財布をちらつかされて独立性が脅かされるようなことがあってはならない。
- p5で社会的な課題に対して論点を見つけるという話をしており、今までより明確に仕事を増やしているのだから、それを予算の箇所に盛り込んでどうか。

《参考資料について》

- 有識者会議で出た意見を差支えない程度に匿名化した上で後ろに参考資料として掲載すると、実際どういった議論がなされたのが分かってよいのではないかと。

⇒ 参考資料1を添付する、というイメージか。

○ 改革で外部評価制度を導入したということなので、その評価書をリストアップしたものを後ろに付けていただくというのではないか。

⇒ 最初の方の会議で日本学術会議からの提出資料として出ていたので、それを紹介する程度でいいのではないか。会議資料を見直してみて、必要であれば添付することとしたい。

○ 海外のアカデミーが日本のことについて何かコメントを出した際に、日本学術会議はどのように答えているのか。そういった海外のアカデミーとのやり取りがあれば教えていただきたい。

⇒ フランスのアカデミーが2011年にまとめた見解のうち、3つのうち2つについては、当時の副会長が持参してくれた。2012年の4月に日本学術会議がまとめた提言を公表した際、全文を英訳して発信した。その中で、フランスアカデミーの提言に答えることになった部分もある。フランスのアカデミーとはその後も交流があり、御礼を申し上げて連携を進めるとともに、その後、原子力関係のテーマについて国際会議を開催した際にも来ていただいた。

また、米国のアカデミーも、福島教訓を米国の原子力発電所にどう活かすかということについて議論を行う委員会を立ち上げた。これについては、先方の会長と連絡をとり、日本で会議を行う場合の受け入れ、その際の日本学術会議のメンバーとの懇談などを行った。委員会での議論の結果については、先方から報告に来てもらい、議論を行った。

このような形で、それぞれ、それなりに対応してやってきた。

⇒ そういった事例を付録等で紹介してはどうか。

⇒ 日本学術会議は海外のアカデミーとのやりとりをもっと広報して国民に伝えるべき、というような意見を述べることは考えられるが、報告書に具体的な事例を付けることは難しいのではないか。

⇒ ご趣旨は、日本学術会議の国際活動は非常に重要なので、海外のアカデミーへのレスポンスも含めて促進すべき、ということだと思う。国際活動は非常に発展しており、例えばフューチャー・アースというプロジェクトの事務局を引き受けるということで、これまでのような国際会議に出席するというようなことからかなり踏み込んだ活動をしている。対外的に見てアカデミーが存在するというのは非常に重要なことだと思う。

⇒ 言いたいのは、事務局に国際活動を担当する部署がいるのではないか、ということである。

⇒ 現在、幹部の1人は外務省から来てもらっており、様々ご活躍いただいている。今後いろいろな努力をさせていただきたい。

(2) 事務方より、今後の進め方に関して、本日の議論を踏まえて事務方において報告書案

未定稿

の修正を行った上で委員に送付し、それに対してメール等で委員から意見を寄せていただき、さらに事務方で修正を行う、というような形で進めたい旨、説明があった。

また、尾池座長より、次回会議までに今回の欠席者も含めてメールでのやりとりによって報告書の内容について議論を行い、結論まで達するようにした上で、3月20日の第7回会議を最終回としたい旨、発言があり、了承された。

<文責 内閣府大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室>

※ 速報のため事後修正の可能性あり